

## ロシアにおける反ユダヤポグロム史のための資料集 (7)

黒川 知文

社会科教育講座

### The Materials for the History of Anti-Jewish Pogroms in Russia (7)

Tomobumi KUROKAWA

Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

第143号

報告メモ。クルスク県知事閣下へ。プチヴリスキー郡貴族長より。

プチヴリスキー郡と隣接するコノトプにおいて発生した騒乱は、我々の農民たちの心を強く刺激した。グルスキー、ヴヤゾヴィー、ポチェチュキ各村やゼムリヤンカ村において、住民たちは、コノトプ市のユダヤ人略奪に参加しており、「皇帝の指示によって、ユダヤ人が殴られている。今殴られているのはユダヤ人だが、その次は地主だ。土地はすべて地主から没収されて、農民に分配されるだろう。」という噂を強く聞いたがっている。このような噂話、特に土地の分配についての噂は、農民たちの心に最も容易に入り込み、影響を与える恐れがある。民衆の間に根強く信じられているこのような噂は、もっとも騒乱を引き起こしやすく、騒乱の結果は予測しがたい。もちろん、何らかの暴動が起これば、それは軍隊の導入により鎮圧されるだろう。しかし、これは、コノトプの例のように、遅きに失することにならないだろうか。コノトプでは、軍隊が導入されたのは、何もかも壊され、奪われ、救い出すべきものがすべて消失してしまった後だったからだ。もちろん、軍隊が来なければ、警察（特に村の警察）では、手も足も出ないわけだが。ゼムリヤンカ村での資産没収の際に、農民たちは、派遣された補助警官に対して抵抗した。警察署長と平巡査たちは、これと同じ要件で他の村々に出かけていたため、補助警官は物品を没収できず、むしろ殴られそうになったので、逃げ出すしかなかった。その後、日を改めて、警察署長本人が出向いた時にも抵抗があった。例えば、彼らは、もし探すなら、まず担保を置いてからにしろ、と叫んだ。警察署長をスミルノフと呼び捨てにし、次のように言った。「まずあんたが我々を縛れ。その後で我々があんたを縛り上げるから。」と。もっぱらスミルノフ警察署長の指導力と郷長の精力的な働きによ

り、略奪品を押収し、3人を逮捕することができた。ある平巡査がポチェチュキ村で、「5月9日に土地の分配があるので、地主を殺さねばならない。」という噂を広めた人間を逮捕しようとした時、この男を守る人々が現れ、巡査に襲いかかった。この襲撃により、男は逃げ去った。巡査は、襲撃者を撃退するために、サーベルを抜かざるを得なかった。たしかに、男を逃がした人々は3、4人いたが、残り的人々はただ黙って見てただけで、逮捕に協力し、巡査を守ろうとした人は皆無であった。暴動の矛先はもっぱらユダヤ人に向けられたというわけではないことを示すために、私は、次の事実を照会したい。グルスキー村において、ある貴族が所有するアルコール醸造所の労働者たちが彼に向かって、「旦那のウォッカを飲まねばならなくなる。地下貯蔵室が壊されるので」と言った。近々土地の分配が行われるという噂は農民の間に根強く残っており、ほとんどあらゆる場所で聞くことができる。彼らの期待が実現していない以上、それらが引き金となって「地主を殺せ」という脅し文句が実行に移されることなどありえないとは誰も言えないのである。こういったすべてのことのゆえに、私が統治する郡のほとんどすべての貴族たちは、私を通して閣下にこれらすべてについて報告し、発生する恐れのある騒乱に対して予防措置を取っていただくよう閣下に嘆願せざるをえない状況になっている。この予防措置は郡に、特に、鉄道駅近くにある2つの村に部隊を派遣することによってのみ可能である。貴族長L・チェルノフ。(Ll. d. 199-200)。

第144号

内務省。ハリコフ県知事。官房。第793号。1881年5月14日。ハリコフ。内務大臣殿へ。拝送した5月6日付第732号の電報において、南西ロシアで起こったのと同じ騒乱がハリコフで起こる恐れがあり、それを防止するために地元当局がどのような措置を取ったかを閣

下に通知いたしました。現在、私の個人的な観察からだけではなく、ハリコフの市民たちからの反響を聞いても、5月8、9、10日に居酒屋における販売を制限することは、最も有効な措置であることは明らかです。ハリコフ市と同様に、ハリコフ県においても、現在まで、ユダヤ人への襲撃が計画されているとの噂は根強く残っています。また、最近、キリスト教徒は、ユダヤ人だけではなく、すべての裕福な階級を襲撃しなければならないと執拗に呼びかける宣伝ビラが配布されています。これらを考慮しますと、私は、総督の許可のもとに、ハリコフ市や郊外の居酒屋の営業制限を次の祭日（5月17、21、24、31日、及び、6月1日）まで延長し、開店時間を午前11時以降、閉店時間を夜8時にする必要があると考えるのであります。上記について報告致します。また、現在までハリコフ市及びハリコフ県において、騒乱は一切発生していないことを付言致します。県知事グレッセル。(L. d. 201)。

#### 第145号

内務省。タヴリダ県知事。官房。第59号。1881年5月15日。ベルジャンスク市。内務大臣へ。

5月5日、オレホフ市において始まった騒乱について最初の電報を受け取った。ユダヤ人が所有するすべての商店、居酒屋、卸倉庫が略奪にあった。すぐに、メリトポリ市に駐留する中隊の一つを指揮する特命職シモニチ伯爵に対して、オレホフ市に向かうよう命令が下った。目的は、農民たちの気持ちを静め、騒乱を鎮圧し、これらの騒乱の原因を調査し、可能ならば首謀者を逮捕することにあった。5月6日、ベルジャンスク警察署長から「アレクサンドル郡の隣接村の農民たちが興奮状態にある」との報告を受けた。「この興奮と略奪がさらに激しい性格を持つものではないだろうか」との不安を抱きつつ、また、同時に、すでに発生した騒乱を鎮め、その継続を阻止することを願いつつ、私は、電報で、臨時オデッサ総督に大隊を派遣してくれるよう要請し、許可を得た。しかし、現地においてこれが緊急に必要であることを確信していたが、私は、8日に行くことに決めてあり、それよりも前にこれらの許可を利用する予定はなかった。しかし、7日に、ベルジャンスクの住民と警察署長から「アレクサンドル郡に隣接する村々において略奪が続いている」という知らせを電報で受け取ったので、私は迷うことなく、臨時オデッサ総督の指示に従い、電報にて大隊を招請したのである。私は、年間行事である大縁日が開かれ、人々が大量集まるために騒乱が予期されていたポリショイ・トクマク村に自ら出かけた。目的は、住民を安心させ、農民を説得するためであった。私はこの目的を十分に達成した。トクマクへの途中で、メリトポリとベルジャ

ンスキー郡において、私は寄り合いを召集し、農民を説得した。特命役人であるシモニチ伯爵に対しては、オレホフからトクマクに来るよう提案した。それは、彼から、オレホフと近郊においてどのようなことが起こったのか、また、それに対して彼がどのような措置を講じたのかを口頭で聞いたかったからである。シモニチ伯爵の口頭での報告によれば、司祭たちや市長、市役所、ベルジャンスク郡庁議長トヴビチ、市警察署長による時宜に適った精力的な措置が講じてくれたようだ。彼らは、教え諭したり、自ら逮捕したりした。例えば、トヴビチは、自分で何人かを逮捕した。彼らの措置のおかげで、ただひたすらにこの行為のおかげで、騒乱は一時的に鎮圧されたのである。ユダヤ人の家が破壊され、その持ち物が略奪された。被災者や被害者はいない。ちょうどよい時に中隊が到着した。すでに見たように、騒乱は他の方法では鎮圧されなかっただろうから。群衆は激昂しており、翌日には、ロシア人の商人や、ユダヤ人の持ち物を自分のところに隠していた人々や、彼らに宿を提供した人をも襲撃し、略奪する恐れがあったのだ。警察が対策を講じ、私が説明をした以上、もはやどのような動きも起こらないだろうという結論に達したので、私は10日にポリショイ・トクマク村からオレホフ市を通して、暴動とユダヤ人への略奪が起こり、今後も騒乱が起こることが予想されるエカチェリノスラフ県境の近くのすべての村に移動した。至る所で寄り合いを開き、秩序を回復し、当局に完全に服従するように農民たちに説明し、説得した。彼らの行動が向こう見ずであり、それがどのような破滅的な結果を生むかを示しながら。気づいた範囲内で言えば、農民たちは私の言葉を改悛の心を持って聞いていた。幾つかの村では、略奪に参加したことを自分で告白する者もいた。農民たちが多くの略奪した商品をステップの一箇所に持って来て、それらをそこに無造作に置いたり、責任をとらされることを恐れて、池や小川に投げ込んだりし始めたので、私は、予防策として、盗まれた商品の一部だけでも保存するために、オレホフ市と同様に、略奪のあった村々においても、ある期間を設定し、その期間中に、農民は商品を持ってくる責任があり、持ってきた物についてはいかなる責任も問わない（ただし、首謀者と教唆者は例外）、その期間の後、調査が行われ、もし誰かのところに盗まれた物が見付かれれば、その者は略奪者として提訴される、という決まりを作り、それを実行する必要があると考えた。この施策の結果、非常に多くの者が盗品を持ってくるようになった。この件に関する形式上の調査は、検察官自身とタガンロクスキー管区裁判所の4人の審議官によって行われた。

略奪には、あわせて15000人ほどの人口があると思われる10個の村の住民が参加し、裁判において全員に責任を問うことは不可能である。これは、検事の意見や

結論と一致しており、1867年の刑法罰及び矯正罰に関する法律第269条の趣旨と一致している。しかし、略奪が行われた村の住民や隣村の略奪に参加した人々に対しては迅速な処罰が下ることが必要であると確信していたので、私は、村民の金でこれらの村々に軍隊を配置することに決めたのである。これがどうしても欠くことのできない措置であると思ったのは、一般の人々は似たような事例において常に「彼は罰を受けるのか受けないのか」という疑問への答えを待っているからであり、自分の今後の考え方や行動をこの回答に合わせて調整するものだからである。リーダーや教唆者たちは、正式な調査が終わり次第すぐに裁判に掛けられるだろう。概して農民たちは、完全な悔い改めを行って、今後このような騒乱を起こすことは一切ないと期待できるが、残念ながら、ベルジャンスク市については、同じように期待することはできないのである。私は、村々を巡回していた途中でこの市にやってきた。この巡回の目的は、オデッサ臨時総督から電報で与えられた任務を遂行すること、市の保安計画について調査・説明すること、タガンログからここに派遣された大隊を郡内に配置することにあつた。ベルジャンスクの住民は極度の緊張の中にあつた。一方で、悪いのはユダヤ人自身であつた。彼らは、それがどのようなものであれ、ひとたび行政当局側からの支持があると、挑発的な調子で、面と向かって相手を嘲笑するのであつた。これは、地元の市民たちをいらだたせ、憤慨させた。これらのユダヤ人の要請によって、復活祭の祝日に、中隊が派遣されたことに町人たちは怒り、不満を募らせた。というのも、すこしもそのような口実を与えるようなことをしなかつたにもかかわらず、まるで自分たちからユダヤ人を守るためであるかのように派遣が行われたからだつた。市民社会の雰囲気を感じとるために、私は、彼らの会合に個人的に参加し、「市民全員が合意した取り決めを守ってくれ。不安に怯えているユダヤ人に対して幾分でも寛容になってくれ」と言って説得に努め、拝み込むことさえした。しかし、答えはいつも同じであつた。このように頼んでも、彼らがすでに抱いている決意が一層堅くなるばかりであつた。彼らは、すべてのユダヤ人をベルジャンスクから完全に追い出すよう嘆願することに決めていたのである。このような嘆願はまったく違法であり、理屈も筋もあつたものではない。当然のことながら、どのような場合でもこのような嘆願が受理されることはないのだ。たとえ彼ら市民たちが、自分たちの側から騒乱が起こることはけっしてない、暴力も行使するつもりはまったくないと言っているとしても、彼らの興奮状態を見れば、これを信じることは困難であり、あらゆる事態に対して準備しておくべきだろう。上記について、閣下には次の点ご検討賜りたし。やはり大部分町民から構成されている市の共同体が講じている自

衛に期待を置くことはできない。共同体の指導者のプライドを傷つけないために、私は、彼らに対して市を守る方法を指示した。しかし、この方法を真面目に受け取ることはできない。これは子供だましでしかないからだ。村々を守るために派遣された大隊から2個中隊をベルジャンスクに留めておくことがどうしても必要である。村のほうは、現在平静であり、処罰として部隊を各民家に宿泊させるよう指示を受けている。ベルジャンスク警察の市と郡のすべての活動を調査した結果、分かつたことは、現在まで彼らが取つた対策はすべて完全に正しく、理に適つたものであつたということである。ベルジャンスク市の共同体代表者の幾人か、すなわち、今回会議に参加した市長、軍司令官、管区裁判官たちや検事、その他の人々は、ベルジャンスクの市警察の活動について、特に、今回市と港を管轄したコランジの警察署長が、騒乱を起こす恐れがある要素を予防するために警察が抜かりなく取つた機敏な行動と、すべての措置に対して感謝の意を表明した。ユダヤ人たちは、自分の個人的な利益についてしつこく拘り、警察の無為無策を不当に非難した。彼らは、恐怖のゆえに、警察がユダヤ人一人一人について配慮してくれることを期待していたからである。以上のことは、ベルジャンスクの郡警察についても言えるのである。県知事カヴェリン。(Ll. d. 204-208)

## 第146号

キエフ、ポドリスク、ヴォルィンスク総督。1881年5月16日。第1938号。内務大臣殿へ。

南西地区の、ユダヤ人の数が全人口の15パーセント以下であるユダヤ人定住地において、大衆だけではなく、知識階級の人々までもが、経済面において、ユダヤ人に無条件に依存している。例外なくすべての生活領域、経済、商業、不動産等において搾取を行っているユダヤ人は、自分の無力を自覚しているほとんどすべての地元住民の憎悪の対象となつた。かなり以前から、特に民衆たちはユダヤ人に対して好意的に接して来なかつた。しばしば正当性を見せた彼らの苦情が、いつまでたつても満たされなかつたのは、ユダヤ人独特の敏捷さのゆえであるか、それとも、地方において歴史的に形成されてきた環境のゆえであるかのいずれかであつた……このことは素直に告白せざるを得ない。不満はさらなる不満を生みだし、それは、蓄積し、地に根を張るようになった。この不満が長い間爆発しなかつたのは、ただ、外面的なきっかけがなかつたことと、一目でそれと分かるような何らかの具体的な理由がなかつたからである。すべてのロシア人を揺さぶつた3月1日の事件は、この醜悪な悪事の原因がどこにあるのかという疑問を人々に抱かせ、この地中深く

でくすぶっていた不満を表面に引き出し、光を当てることになったのである。無政府主義者の政党に力と生命を与えているものは何か。この疑問に対して答えを示す多くの風評が世に現れた。これらの中に、皇帝暗殺直後、平民の間に広まったある噂話があった。それは「ユダヤ人が最近の騒乱の犯人であるから、彼らを殺すべきだ」という内容のものである。皇帝暗殺者の中に、ユダヤ人の名前ゲシ・ゲリフマンが含まれていることが分かったと、暗愚な大衆は、ますます自分の考えの正しさを確信し、自らの不幸の報復の刃をユダヤ人に向けなければならないと考えるようになった。これらの噂はまたたくまに拡がり、より深く沈潜していった。感謝祭の頃には、もうすでに騒乱の兆候が現れていた。住民の性格により、この騒乱は都市でより激しさを増したため、私は、主にキエフにおいて、騒乱が発生した場合に備えて警察に予防措置を講じさせた。それゆえ、まだ四旬祭の前半において、キエフ市を5つの軍区に分割し、それぞれの指揮は、特別将官にまかせ、各軍区に必要な数の部隊を派遣した。当直班を定めて、そこからパトロールと騎兵斥候隊を送り出した。キエフに配置された全部隊の指揮を第33歩兵師団長チェメルズインに委ねた。復活祭のはじめの数日間は平穩に過ぎたが、エリサヴェトグラードでの動揺が騒乱に新たなエネルギーを供したため、私は、私の管轄県においても監視を強化せざるを得なくなった。そのため、私は、キエフ、ポドリスク、ヴォルインスタの各県知事に対して、彼らの側で、住民の心を鎮めるためにあらゆる手段を講じたらどうかと提案した。また、4月19日に、コルスン村とスメリ村において労働者たちが騒いでいるとの電報報告を受けたので、市首脳部を助け、秩序を維持するために、現地に大隊を派遣した。4月23日夕刻、ユダヤ人と労働者(主に日雇い)が最も密集して住んでいるキエフのポドリにおいて、労働者によるユダヤ人略奪の兆候が見られたが、警察の尽力により、襲撃は回避され、夜には騒乱も起こらなかったため、平穩が回復した。同じ日に、私は、中隊を、ファストフ鉄道フンドウクレエフカ駅近くのアレクサンドル村に派遣した。この村には、人々が縁日を目当てに集まり、警察の報告によれば、騒乱が起こる恐れがあったからだ。市の通常の生活の流れを止め、騒乱防止措置について文書で告示することは、危険だと思った。このようにすると、これなしでも目の前を進む軍隊をすっかり信用していた(軍隊は毎日市を巡回していたからである)群衆をかえってより一層興奮させてしまうからだった。騒乱の鎮圧のために措置が講じられた。その後の出来事が証明したように、騒乱鎮圧の対策についての予防公告があったにもかかわらず、オデッサにおいて騒乱が起こったのである。4月26日、日曜日、春の晴天の祭日に人々は通りに出ていた。労働から解放された一団の人々、暇

をもてあました日雇い労働者たち、その他の群衆が、あらゆる場所を埋め尽くしていた。この時、昼の12時頃、ポドリにおいて再び殴り合いの喧嘩が始まった。群衆が集まり、その後騒乱に発展した。略奪と暴動に関する本日の審議において、それらの第一の原因は明らかにされなかったが、ユダヤ人自身が取った何か不適切で非常識な行動が群衆を憤慨させたきっかけである、と考えられる。数分も経たぬうちに、これらの群衆は多大な数に発展し、すぐさまアレクサンドロフスク通りのジトニー市場やカナヴァに密集するユダヤ人の家や商店に迫った。軍の当直者たちがすぐに召集され、すでにユダヤ人の家を数軒破壊し始めていた群衆を解散させるために現地に向かった。軍隊が到着すると、群衆はすぐに四方に走り去るか、または、歩兵隊やコサック隊の一斉の圧迫によって方々に散らされた。だが、その時、軍隊がまだ現れておらず、破壊活動に取りかかっている場所に、他の人々が集まっていた。最初は、主にポドリで暴れていた人々からなるグループが多数形成され、「ユダ公を打て。奴等はすべてを独占した。生活が苦しいのは奴等のせいだ。奴等は諸悪の根元だ。ユダ公は皇帝を殺したのだ!」という叫び声をあげた。家財や商品が家や商店から引きずり出され、投げ捨てられ、ずたずたに引き裂かれ、破壊された。しかし、群衆は何も盗もうとせず、金銭すらも奪おうとしなかった。口笛を吹いたり「万歳」と叫びながらある場所でひとしきり乱暴狼藉を働くと、次の場所に向かった。ロシア人や他の人々の持ち物やユダヤ人に属さないものには手を付けず、すべてまったく無傷のまま残した。間違えて「非ユダヤ人の」家に入ると、群衆は何も手をつけずに、すぐにそこから出て行った。ロシアの名前がついたユダヤ人の商店に近づいて、それがユダヤ人の店であることが分かった。「自分の名前でもないものを掲げて、ここでもユダヤ人は人を騙そうとしている」と憤慨し、特に夢中になって略奪を働いた。ユダヤ人ならば、手工業者であろうと、乞食であろうと容赦されなかった。生命に触れられることは全くなかったが。多くのユダヤ人の居酒屋を破壊し、軍隊によってポドリに拘留されている千人の群衆は、山や横町を通過して、町の別の場所スタロキエフスカヤにこっそり忍び込んだ。そして、ここにおいて、彼らは、(高級店や工場が密集している)主要な通りから軍隊によって追い出され、市の他の地域に四散した。周知である資産家プロツキー家は、市のこの地域においてももっとも被害が大きかった。というのも、群衆が、ジトミル通りとヴラジミル通りの角にあるゼリマン・プロツキーの家を破壊し、イサーク・プロツキーの家の窓を叩き落とすからだった。しかし、到着した軍隊によってそれ以上の破壊は阻止された。彼らは、ポドヴァリナヤにおいて、グレベニの家を壊そうとし、ユダヤ人のバザールで、兵士の妻グロズマ

ンの商店を、また、ボリショイ・ヴァシリコフスカヤ通りでスヴェルドロフの時計店をめちゃめちゃにした。ユダヤ人の市場でドンジコフの商店への襲撃計画は、阻止され、その後、軍隊に追いやられた群衆は郊外に向かった。市の最も高い場所にあるペチェルスクは、最も被害が少なかった。というのも、そこで破壊されたのは、商人ラビノヴィチの家の居酒屋1軒だけで、その後、夜に騒乱は郊外に集中し、一時平静であったポドリで再発したからである。特に被害が大きかったのは、大商業村シュリヤフカ、ソロメンカ、そして最後にデミエフカ村である。ここでは、まずすでに夜中に、何人かのユダヤ人が殴られた。その後、集まった群衆の不注意によって、夜火事が起こった。しかし、消防隊によって火は消し止められた。小火は、ポドリにおいても起こった。朝方、軍隊の労苦が増し、一般の人々の疲労も重なって、群衆は少し少なくなり、すべてが沈静化したように見えた。騒乱の一番はじめの頃、すばやく市中を駆けめぐったポドリにおける騒乱についてのニュースは、すべての住民を好奇心の塊に変えた。知識階級に属する人々や婦人や子供は、群をなして歩道に立ち、暴徒を見ていた。どんなに説得しても、脅迫しても、野次馬を動かすことができなかった。そのような状態において武器を使用することは、まったく不可能であった。また、きわめて窮屈で動きが取れなかったため、軍隊は、暴れ出した人々を、彼が犠牲にしようとして狙いを付けていたユダヤ人の住居から追い払い、包囲し、撃退することしかできなかった。中心部、すなわち、クレシャチク、ベッサラプスカヤ広場や、きわめて大きな市の他の多くの地点が、被害を受けなかったのは、ひとえに、絶え間なく町中を動き回ってくれた小隊のおかげである。破壊活動のせいで、私は、住民に対して「翌日騒乱が再発すれば、反乱者に対して必ず武器を使用する」と言わねばならなかった。また、もう一度住民に対して「群衆の中にいる野次馬たちもこれによって悲惨な目に遭うことになる」と警告しなければならなかった。この公告は、4月27日の朝方、市全域において張り出された。それにもかかわらず、朝になると再びポドリや郊外や町の中心部において騒乱が発生した。ミハイロフスカヤ通りにおいては、ユダヤ人フィフテンゴリエツの家と、彼のところに下宿していたユダヤ人弁護士レヴェの持ち物が略奪の被害に遭った。散らされてゴセリ・ブロッキーの工場に向かったグループの一つは、工場の窓を割り、もう一人のブロッキー家のメンバーであるアレクサンドルの所有物を破壊した。それまで銃床しか用いなかった軍隊だったが、群衆から石をぶつけられたため、一斉射撃をせざるを得なかった。これにより、一人の女性がその場で死亡し、3人の男性が負傷した。ズヴェリンツェムという地区において、その日、何軒かのユダヤ人の家が破壊され、大商業村デミ

エフカにおいてユダヤ人の学校が放火された後、27日の夕方頃に騒動は収まった。概算すると、(デミエフカを除く)市内において546軒のユダヤ人家庭が被災した。物質的損害を計算することはきわめて困難である。というのも、被災者からの情報では、被害額は約130万にのぼるが、実際にはかなりそれより下回ることは確実だからである。市内での騒乱と略奪のために逮捕された人々は、現在大多数が釈放されている。〈注〉1 それらの逮捕者の数は、最初の数日間で1000人に上った。騒乱は、キエフでは収まったものの、キエフ郡及び一部ヴァシリコフ郡に拡がり、ヴァシリコフ市自体では小規模の騒乱が発生した。その後、少し経ってから、鉄道路線沿いに、ファストフ大村(キエフ県)とジメリンカ大村(ポドリスク県)において騒乱が起こった。このような事情や、市や大村や村に分散して住むすべてのユダヤ人(彼らは自分を守ってもらうために軍隊の投入を要求している)の心を占領している怖ろしいパニックを考慮して、私は、次の措置を講じた。〈注〉2 5月3日、同じ特徴を持つ騒乱がヴォルィンスク県とキエフ県の境界線付近にある大村(ヴォルィンスク県のヴォロチンスク大村とキエフ県のスメラ大村)において起こった。ヴォロチンスクにおいて、騒乱は深刻な規模ではなかったが、スメラでは大規模であった。スメラの住民は主に軽工場労働者であるが、鉄道職人が集まっていた。郊外には、ポプリンスキー伯爵が所有する砂糖工場がいくつかある。スメラにおいて、あらかじめ、キエフにおいて騒乱が起こる前に、ベンデルスキー連隊の大隊が派遣されていた。その一個中隊がシュポラに派遣された。〔〈注〉1: 私の5月3日付の報告第1595号。2: 軍及び市の所轄官庁に関して取られた措置のリストが掲載されている。編集者〕騒乱は次のような出来事から始まった。一日の朝に、農民たちが牛を売るために連れてきて、30ルーブルでそれを誰かに売るところだったが、近づいてきたユダヤ人(肉屋)が、33ルーブルの値をつけた。そこで、農民が牛を差し出して金を要求したところが、ユダヤ人は30ルーブルしか渡さなかった。この後で、残りの3ルーブルを渡せと言った農民に対して、彼は斧で彼を殴り傷を負わせた。これにより、当初殴り合いの喧嘩が始まったが、ユダヤ人の住居に対する襲撃に発展し、騒乱が巻き起こった。この騒乱は非常に大規模であり、住民は、ユダヤ人に属するすべての持ち物を破壊し、発砲によって犠牲者が出てもお騒乱は続いた。事態は大村において収まったのちも、さらに近郊の村々にも波及した。しかし、騒乱はそこにおいて収まり、現在、この地方はまったく平静である。キエフにおいて騒乱が発生した当初から現在まで、人々の間では、騒乱がなぜ起こったのか、その最も妥当な原因について、あらゆるうわさ話が広まっている。犯人グループが自分たちの間で、組織的に行動す

ることを見たがっている人々がきわめて多いのである。赤いシャツを来た人々が集団の中に現れたとか、参加者の何人かが平民服ではない服を着ていたとか。モスクワ人がまずキエフにやってきてその後にその地方に散って行き、騒乱をそそのかしているとか。活動が同時に起こっている[のはおかしい]とか。そして最後に、地主が土地を安全に保つことができるかどうか心配しており、とくに、農民たちが土地を再分割せよと言って騒乱を起こそうとしているという噂を信じているとか。これらすべてを一緒に聞いて、ある人々は、「これは、社会主義政党が騒乱に関与しており、住民たちによる騒乱全般が、彼らの陰謀によって起きたとしか考えられない」と言う。もちろん、住民が興奮状態にあるのは扇動者たちのプロパガンダによるものであることを否定できない。しかし、それでもやはり、事態に関するこの側面について特に真剣に調査を行った結果、私は、「騒乱の準備や活動に彼らが積極的に関与したという指摘は噂の域を出ず、実際のデータはそれとは逆のことを証明している」ということを確信せざるを得なかったのである。他の都市で逮捕された人々と同様に、キエフで逮捕された1500人の中で、今まで、政治的な関係で要注意人物と見なされた人は一人もいなかったのである。検挙された群衆はすべて、地元の労働者か労賃を求めて他の場所からやってきた労務者であり、農民であった。つまり、主として、彼らは反政府的なところがまったくない人々であり、まして、社会革命的傾向などまるでない人々なのである。恐らく、特に兵器工場の労働者や、鉄道労務者の中に、「南部労働者同盟」の影響を受けたと感じられる人物がいるかもしれない。しかし、概して、彼らの影響は、まったく目立たないものである。逆に、群衆をつき動かしていたのは、自分たちが政府に献身していることをその野蛮な不法行為によって証明したいという願いであった。特に、農民たちは、ユダヤ人は国家を分裂させ、あらゆる点で敵対的な民族であると信じており、それゆえに皇帝から「ユダ公を打て」との命令が出たのだと言っているのである。騒乱の前に広まった噂の中で、もっとも分別があり、しばしば非常に裕福な経営者は、労働者とともに「ユダヤ人は生活全般の妨げとなり、政府のすばらしい計画にブレーキをかけているので、彼らをこの地方から放逐する必要がある」という意見を支持していた。すべての動きの中に、民衆……大ロシア人及び、特に小ロシア人……の心の奥底にある敵意が働いていることは疑うべくもない。彼らは、ユダヤ人による経済的搾取と欺瞞的な取引に憎しみを抱いていた。ユダヤ人の詐欺行為の犠牲になるのは信じやすい幼稚な人々であった。ユダヤ人は金儲けに目が無く、軽労働を好み、すべての責任を回避する。そして、恐らく、他宗教の者に対して、ある程度、宗教的な憎悪を持っているだろう。モスク

ワ人が教唆者としてやってきたという噂は、春とともに仕事を求めて南西地方に大挙してやってきた大ロシア人が騒乱に参加したことに尾ひれがついて伝わったと見るべきである。逮捕者の中には、カルシュ、スモレンスク、モスクワ各県の農民や、復活大祭の直前かもしくはその後にキエフにやってきた大工や土方や左官が含まれていた。たしかに、村々には、農民をそそのかして騒乱を起こした人々が現れたが、これらの人間は文盲の大衆出身であった。彼らは、すべてのユダヤ人を殺せとの命令を受けて派遣されて来た人々である。そして、「ユダ公」への憎しみを努力してかき立てた人々なのである。たしかに「社会主義革命政党は、すでに始まっている騒乱を利用していない」と無条件に認めることは困難であるし、また、「自らが追求している真の目的を隠しつつ、密かに運動を支持することもせずにいる」ということを認めることも難しい。しかし、騒乱がまだ準備ができていなかった社会主義者たちの不意をついたため、彼らは地方全体における運動を開始することができなかった、という事実を確認すべきである。4月27日の夜から28日にかけてキエフに秘密の印刷所が発見されたことは、説得力のある証拠となっている。これについては、キエフ県代表からの本年5月5日付第157号において閣下にお伝えしました。この件で逮捕された官吏パーヴェル・イヴァノフの息子とサクソンの臣下キゼルは、作業の最中に逮捕された。そこで発見された宣伝ビラを印刷し終えた直後のことだった。ビラの内容自体は、この前日に起こった騒乱についてだった。革命家たちは、人民に対して団結して一つの方向に進むように指示しつつ、次のことを彼らに吹き込もうとしていた。すなわち、ユダヤ人の中でもある人々は打つべきではない。貧しいユダヤ人は避けよ。滅ぼすべきなのは、富農や地主や、人民を抑圧する人々を保護する政府の手先どもである、と。非常に野蛮な形で表現されたユダヤ民族に対する憎しみがうまく収まることを願う。また、労働の時期が始まれば、平民の関心はそれに集中するので、発作を鎮めることになれば、と願うものである。現在、この地方では、見た所すべてが平静である。しかし、6月はじめに農作業が始まるまでの間は、騒乱が再発しないとはまったく不可能である。一方では、興奮状態はまだ収まっていないし、他方では、ユダヤ人側が応答してくる恐れもある。パニック状態が収まって正気に返り、軍隊の保護下にある自分たちを見た彼らが、再び住民を興奮させる恐れがある。これらのことを考慮し、すべての予防策は現在まで解除されていない。軍隊の任務は増強されたままであり、宿営における集会は一時的に中止されている。移動された部隊は指定の場所にとどまっている。民間の方面では、私が特別な関心を払ったのは、地元警官の精力と活動の強化であった。スメリ村地区に、特使を派遣し

た。それは、すでに興奮状態にあったその地方の状況を調べ、騒乱を予防するために必要な新しい手段を講じるためであった。最後に、私は次のことを付け加えねばならない。すなわち、私のところに大量に届いた嘆願書を読んだり、事件について公平な人々から意見を聞くと、私は「多くの被害を被ったユダヤ人たちは、今でも自分たちが取った行動について自己批判する気はなく、自らを、ゆえなく苦しむ者とみなし、あいも変わらずキリスト教徒たちを搾取し続けている」と考えざるを得ないのである。このような状態を行政的手段によって打開することは不可能である。この地におけるユダヤ人問題は、緊急を要し、一連の徹底した立法的手段によってのみ解決する問題である。私は、キエフ、ポドリ、ヴォルィン総督に就いた日からすぐに現在の状態に特別の関心を払った。そして、地元当局に、数字の報告をするように命じた。すべての資料が集まり次第、閣下には、ユダヤ人住民のどのような部分がたえず人々に不満を与えているか、その原因となっている事柄について必ずご報告いたします。以上の問題が現在の状態にとどまっているのはある程度の間だけで、それが再び悲しむべき事件に逆戻りする可能性は高いと言わざるを得ません。このことは、当地がたった今証明したばかりであり、このような事件は、わが国の南方や南西の辺境地区で周期的に発生しているのです。侍従武官長ドレンチェレン。(L. d. 209-225)

## 第147号

ハリコフ臨時総督。1881年5月14日。第673号。ハリコフ市。秘。内務大臣殿。

騒乱を予防するために、かなりの数の軍隊が現在、ユダヤ人が住む様々な地域に配備されている。社会の安全を守るためのこのような手段は、長期に渡って継続することは不可能である。軍隊は通常の夏期訓練に入らねばならないからだ。私は、チェルニゴフ、ポルタバ、ハリコフ各県知事に対して、それぞれの県における安全を確保するために、軍隊以外にどのような方法があるか、また、軍隊はいつ野営に出ることができるか尋ねた。これとは関係なく、私はさらに知事たちに、キリスト教徒住民が現在ユダヤ人に対して特別な敵意を抱いているのは何故か、また、それは悪意のある人々の教唆によって生じた感情であるかどうかも訊いてみた。現在、ポルタバ県知事が、私に詳細な回答を返してきた。この回答では、ポルタバ県のキリスト教徒の対ユダヤ人感情全般について説明されている。その写しを閣下に送付する。侍従武官長K・スヴァトポリク・ミルスキー〈注〉1。(L. d. 230)。

## 第148号

内務大臣。オデッサ臨時総督。1881年5月14日。第152号。オデッサ市。極秘。N・P・インガチエフ伯爵閣下へ。ニコライ・バヴロヴィッチ伯爵様。

ノヴォロシヤ及び南西地区のほぼ全域において唐突に発生したか、もしくは、準備されていた反ユダヤ人騒乱は、あまりにも鮮やかに、経済関係の側面を暴露した。地方政府機関側からは、今日起こっている騒乱の兆候や前触れについて報告が十分に行っていたにもかかわらず、この関係は、悲しむべきことに、現在まで中央政府の注意を引くことはあまりにも少なかった。私は、ユダヤ人問題については、南西地区における経済・社会・政治の諸側面から理解しているという意味においてこの問題によく通じているが、70年代のはじめに、皇帝陛下に特別報告をする際に、詳しくそれについて調べる数多くの機会に恵まれたのである。また、それと共に、私は、この地方の経済的生活の様々な側面におけるユダヤ人住民とキリスト教徒住民の関係調整問題をすべて提起したのである。最近、人々が行った愚かな制裁は、悲しむべきことであり、産業にとっては有害、政治的には危険な出来事であった。政府はたしかに、この制裁を、ユダヤ人問題の重要性について入念に調べるきっかけとすべきであるし、同じ地理的領域に共存してきた歴史を持つこれらの2つのグループの間に平和で正常な関係を築き上げるために急進的な手段を速やかに講じるべきでもある。これらの手段をなぜ早急に講じなければならないかという点、それは、この事件が持つ性格による。その性格自体がそのような対応を不可避的に要求しているのである。というのも、「騒乱が起こったならば、それが今年限りのものであり、近い将来に同じ場所において繰り返されることなどありえない」と期待する根拠はどこにもないからである。ついでながら、一般的かつ基本的な原因から来る影響や過去の経験を除外して考えると、このような確信は、次のような状況から生まれているのである。すなわち、「防止措置を講じたおかげで、ユダヤ人の財産の破壊や絶滅が目立った規模に発展しなかった場所においては、騒乱の再発に関する噂が収まることがなく、ほんの些細な理由でもあれば、騒乱は新しい力を帯びて再起するように見える」という状況である。大衆は、日常生活にかかわる利益を破壊しただけではない。現在の状態は、政治的な意味においても非常に危険だと私は確信する。たしかに、村落において現れた動きと、最初に都市において現れた動きは、いわば、直接的な性格を持ち、昔から蓄積されてきたユダヤ人の搾取と狡猾さに対する苛立ちの最終的な表現であるように思われる。〔〈注〉1:ポルタバ県知事ビリバソフ [へ] の報告書。スヴィヤストボルク・

ミルスキーは[この]報告のために派遣されている。参照：第120号。編者]しかし、現在すでに「革命政党がこの活動を自分の目的の達成のために利用しようとしており、このような好機を彼らがみすみす見逃すはずはない」と考えるだけの強力な根拠が存在するのである。騒乱の第2日目にオデッサにおいて明らかに危険人物と思われる人々が逮捕されたこと。「主人」や権力者の粉碎を呼びかけるビラがニコラエフに貼り付けられていたこと。さらに、ユダヤ人が政府の人々を買収して、自分たちを守らせているという噂が燎原の火のごとく広がっていたこと。これらは、革命家たちが活発に活動していることを示すかなり説得力のある証拠である。実際、ここ当分の間、人々は皇帝に対して抱いている篤い忠誠心を捨てることはないだろう。人々がユダヤ人に対して憤りを持つことによって、革命家たちの計画を実現するのに好都合な（そして、唯一可能であるとすら言える）土壌が生まれつつあると認めざるを得ない。というのも、革命家たちは、騒乱を起こすことによって自らの活動を発展させようとしているからだ。彼らの活動を通じて、大衆は、注意深く、また、徐々に実現されつつある他の目的のために備えられたのである。しかし、もしこの運動に何らかのほっとさせる側面があるとなれば、それはまさに次のことである言わねばならない。すなわち、「この運動は、[政府の]許可が下りたと勘違いした人々によって行われた暴力行為を、皇帝の聖名によって正当化しようとしている」と。もっとも、このような状況があるからと言って、この活動の危険な側面が薄れるということはないだろうが。このように、大衆の心は、一般に揺れ動いており、この動揺は、ロシアにおいてはじめて起こった3月1日の事件によって引き起こされたのである。経済的な領域におけるユダヤ人の最近の成果と、その貪欲な手法によって、ある部分において伝統的であった反ユダヤ感情はさらに強く激しいものに変ったこと。また、それと平行して、ここ数年の農業や商業の不振によって、経済状況が悪化し、キリスト教徒たちが困窮に陥ったこと。さらに、革命的煽動がその後の騒乱の諸局面に追加されたこと。……これらこそ、現在の動乱を惹き起した原因なのである。この動乱は、あらゆる悲しむべき側面と、特有のエピソードを伴いつつ、この暗いキャンパスの中に、ロシア人に特有の盲信と人の良さを描き出したのである。政府は、今や、状況が逼迫しているため、国家の安寧にとって非常に重要な事件について決定を速やかに下す必要に迫られており、鎮圧や刑罰の手段を制限することはもはや不可能である。政治的な先見の明があり、また、古くから主要層を形成してきた膨大な数の大衆の利益を正しく理解し、公平の感覚を持ち合わせている人は、かなり昔に患い、今や国家自体にとって危険な意味を持つ粗野な制裁という形で噴出した病気に対し

て思い切った治療を施さざるを得ない気持ちに駆り立てられている。国家の必要から生まれ、ある日原則として導入されたこれらの治療方法は、常に揺らぐことなく、首尾一貫して適用されなければならない。国内や海外から聞こえてくる異なる意見によって動かされてはならない。この後、長年の南西地方統治から得られた私の経験の結果（残念ながら実現しなかった）を閣下に報告し、御判断を賜りたく存じます。この経験から得られた教訓は、ノヴォロシースキー地方でも適用可能であると私は考えている。今私は、これらの手段の一つに注意を向けたいと思う。その検討と実行は、とくに執拗に行われている。これらの手段は、他の一連の手段の中でも第一位の地位を占めなければならない。この手段とは、ユダヤ人が飲料品の小売り販売をすることを無条件に禁止するというものである。ユダヤ人の居酒屋店主は、町の下層階級の人々や村の農民たちを墮落させ、産業を破壊している。当地区の生活を知っている人ならみなこのことを認めている。もし酒場の主人が同県の村社会の悪を作り出しているとするならば、居酒屋のユダヤ人店主の活動は、それよりも何倍も有害である。というのも、伝統的な考えのとおり、ユダヤ人店主は商売にひたすら打ち込む能力に富み、きわめて独創的な方法を編み出し、小商いにおいて策を弄することや人々を奴隷化することに熟達しているからだ。私が知っている限りでは、ヘルソン郡とエリサヴェトグラード郡の郡会とニコラエフスクの市議会は、最近の事件の結果を受けて、ユダヤ人に居酒屋経営をさせないように嘆願する予定である。ベルジャンスクの市民組合は、政府に対して、ユダヤ人を市から徹底追放するよう嘆願している。私にとってすでに承知済みのことだが、この件については、一般的な理由の他に、「市にあるほとんどすべての居酒屋は、ユダヤ人の手に握られている」という理由もある。最後に、私のもとには、ユダヤ人の中でも分別のある人々がオデッサの議会においてその問題（つまり、同信の人々に酒の商売を禁じることを自分で提出しようとしているという情報がとどいている。この情報を私に伝えたのは、尊敬すべき人物であり、皆に敬われているオデッサ市のラビ・スヴァバヘルである。彼がこのことを私に教えたのは、それがユダヤ人に対する憎悪を抑止するための唯一の方法であると考えたからだ。乱暴を働き、騒動を起こした群衆の本能は、破壊活動の主な矛先をユダヤ人が経営する居酒屋に向けたのである。この問題に関する現行の法律は、この点についてすでにユダヤ人の権利を幾分制限しており（第306条 酒場について）、ユダヤ人が酒類を商う場合、販売する場所は自分の家に限られている。また、彼らが店員として働くことができるのは、同信の人々の店に限られている。しかし、この法令には、引き続いて説明が加えられており〈注〉1（1875年1月8日付財務大臣



の回覧文書、第1251号)、ユダヤ人はこの説明によって、借地の上に建てられた自分の家で酒類販売ができるのである。〔〈注〉1:1878年5月1日及び8日に、コヴネルとブドヴリヤの件に関して、元老院政府財務局がこれに反対の決定を下したにも関わらず、効力を保ち続けている。〕これは、実質的に法律の効力を弱めている。このような法律の解釈のおかげで、ユダヤ人はかなりの自由を与えられ、村における酒類の商売を独占できるようになったのである。ユダヤ人の活動には、このような有害な側面があり、それは民衆の憎しみを極限にまで増大させているのである。この側面を麻痺させるのに残されている唯一の手段とは、酒場に関する法律・第321条から第324条に挙げられている様々な名称の施設において、ユダヤ人が酒類を小売り販売することを場所を問わず全面禁止することである。この方法は、一般に好結果を残すだろうが、その他にも、村からユダヤ人を一掃することを大いに促進するだろう。これによって、彼らは自分たちが一番慣れ親しんでいる生活の手段の一つを失うことになるのだから。私の考えでは、できるだけ早くしかるべき法律を發布すべきである。もっとも、その施行される期日そのものが確定されるのは、早くても来年1882年の1月1日だろうが。この時までには、証明書全般の期限だけではなく、財務大臣が1874年3月20日に確認した、オデッサにおける飲料小売り販売用施設の経営権の小売店側からの返却を定めた法令の一部の有効期限が切れてしまう。予定の処置については、至急事前予告すべきである。その後続く法律の公布そのものは、絶対に10月1日より遅くなくてはならない。とうのも、今月オデッサにおいて、施設経営権の取引が行われ、11月には翌年の権利獲得が至る所で始まるからである。この商売においてユダヤ人に代わろうとする外国人にとっても事前予告は必要である。権利を購入したり、商売道具を取りそろえる等のために、自分の資本を解放したり、資本を用意する時間が要るからだ。疑うべくもなく、提案された処置は、地方の経済状況を知っているすべての人から同意を得られるだろうし、住民に満足を与えるだろう。というのも、この処置は住民に次のことを示すからである。すなわち、「違法な制裁を行えば、政府に罰せられる。しかし、その同じ政府は住民の利益を守るために警戒しており、それを守る力と願いがあるのだ。多くの農家を容赦のない急激な破壊と奴隷化から守ることによって政府は莫大な利益をもたらしてくれるのだ」と。またそれと同時に、この処置は、二つの住民グループの間に平和で正常な関係を打ち立てるのに強大な影響力を持つので、今起こっているような衝突を予防する優れた方策ともなるだろう。現行の法律についてだけでなく、法律に違反して大目に見る姿勢についても、法律関係全般、実生活関係全般にわたって注意深い再調査が必要である。執

拗に続く諸問題のいくつかに関する私の考えは、これに続いて、閣下に申し上げたい。敬具 ドンドウコフ・コルサコフ公。(Ll. d. 242-250)。

(2016年9月15日受理)